

# 資料渉猟余話

その104

そうした眼でもう列をなした。内科、一度『天龍村史』下巻(平成12年)を見直すと、下巻554の項目に「坂部大杉章喜 明治二十五年四月生、昭和二十二年二月二十八日没」があった。また同書下巻822の民俗編の大森山諏訪社の記述の中に次の一文も確認できた。「諏訪社の成り時に坂部で開業 永立ちについて家伝記命堂医院と称した。には、文和元年(一〇三二)に熊谷家初代貞直が手塚光盛末孫の老婆がもつ「当国之一ノ宮諏方大明神之本地普賢尊」を諏訪明神とし、永享は、坂部神原の者で

四年(一四三二)にまつたのをはじめりとしていた。最初に老婆がまつていた地は「宮の本」であつたが大森山に遷された。(中略)ゆかりの地宮の本には、昭和十四年に坂部の大杉という医師が業と神社再建という

## 大杉章喜と、山上の神殿

嶋 不濁

「宮の本神社」を創建した。竣工鎮座祭には昼は弓でにぎわい、夜は富山村山中の獅子神楽が舞つた。神原の大杉家は、幕末まで坂部の熊谷家の重臣、縁戚関係もあり、明治以降も本家は神原の領主だつた。大杉章喜はそ

の分家として坂部に生まれと思われ、熊谷家から大杉家に返却された「家伝記」を読む機会があつたのだから。手塚光盛末孫の老婆が鎌倉時代末に最初に祀られたという大杉の領地「当国之一ノ宮諏方大明神之本地」である。折しも昭和15年の紀元2600年の復古主義の元、紀元節には全国の11

文化的な地域起こしが、分断されたままに記録されることになつたようだ。神原の大杉家は、幕末まで坂部の熊谷家の重臣、縁戚関係もあり、明治以降も本家は神原の領主だつた。大杉章喜はそ



急斜面を切り開いて造営された社殿



射場もあつた



富山村から駆けつけた獅子神楽

万もの神社において大祭が行われ、展覧会、体育大会など様々な記念行事が外催された。この大杉章喜の再興した「宮之本大神宮」もそうした流れの中で捉え、検証していく必要がある。いづれにせよ、再建の5年後に敗戦、その後の革命ともいっていい土地政策による地主層の経済的没落、さらには昭和22年2月の大杉章喜55歳、再検証のスタート

「宮之本」神社は衰微の一途を辿ることになったと思われ、しかし大杉章喜の事はこれで判明した訳ではない。僻地での医業とあわせ、再検証のスタート